毎週水曜日掲載　週刊デイリー高校野球　DAILY SPORTS

夏の甲子園より長い歴史

伝統の一戦を前に集合写真に納まる神戸、兵庫ナインら

100年続く伝統

神戸VS兵庫㊐定期戦

夏の選手権地方大会に第一回から連続で参加し続けている兵庫県有数の伝統校、神戸と兵庫。兄弟校であるこの2校は、夏の選手権大会より長い100年近くの歴史を持つ定期戦を行っている。1908年、神戸一中（現神戸）と神戸二中（現兵庫）の間で行われた練習試合が開催され両チームが母校の名誉をかけて真剣勝負を繰り広げた。“神戸の早慶戦”が今月10日、3年ぶりに行われ、兵庫が7－3で勝利。伝統に新たなページを刻んだ。

◆定期戦（10日・神戸ウエーブ）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
神戸	0	0	0	0	1	0	0	1	1	3
兵庫	0	0	5	0	0	1	1	0	X	7

（神）松井、竹村－三木（兵）森川、高山、中田、平元山、大下

応援にも熱

1世紀の間、一投一打に熱戦する定期戦が神戸と兵庫の間で繰り返された。時代の変遷とともに、定期戦を巡る応援の姿も大きく変わらない。“校の名誉”のために、母校の勝利を狙うこの試合に勝つことは夏の選手権大会への切符を手にするのと同様に、それぞれの甲子園出場を賭けた試合がきっかけだとされている。以後、第1、2回、両校の間で試合が組まれてきた。大正初期の13年ごろから全校応援という形になった。“慶早戦”と呼ばれる試合の歴史は15年に始まった夏の甲子園第4回大会、当時は豊中運動場と古い。

現在は春と秋の定期戦の一環として行われ、ほかの運動部とも「親睦」を深める意味合いが強くなった。ほかにバレー、柔道などの対抗戦が同時に行われ、それぞれの戦績を集計して総合優勝を競う。この日は午前に行われたバレーに続いて、テニス、柔道の順に試合が進められ、夕方からサッカー、ソフトボールの順で行われた。ほぼ一日がかりの大イベントだ。

応援は野球の試合だけでなく両校応援団が過熱ぶりを競う。吹奏楽の演奏に合わせて全校生徒が声援を送る。夏の兵庫大会をもしのぐほどの熱気が伝わってくる。この応援は、学ランスタイルの応援団がエールを送り、吹奏楽の演奏に合わせて全校生徒が一斉に立ち上がる。校歌を高らかに歌い上げる。応援は、ほぼ一日がかりで行われる。

3年ぶり対決は兵庫勝利

昨年、一昨年は両校とも不本意な結果に終わった。今年の3年生たちは、入学以来、最初の定期戦となった。結果は兵庫が本谷拓樹（ひろき）主将、3年ぶりにランニング本塁打などで7点を奪い快勝した。「最初は緊張したが、始まってみたらワクワクして楽しめた。応援のみんなの力で勝てた」と充実感を漂わせた。

定期戦が始まった時期は明確ではないが、兵庫の野球部創部間もない1908年、兄弟校である神戸との間で行われた練習試合が始まりとされている。以後、第1、2回、両校の間で試合が組まれてきた。大正初期の13年ごろから全校応援という形になった。“慶早戦”と呼ばれる試合の歴史は15年に始まった夏の甲子園第4回大会、当時は豊中運動場と古い。

現在は春と秋の定期戦の一環として行われ、ほかの運動部とも「親睦」を深める意味合いが強くなった。ほかにバレー、サッカー、ソフトテニス、柔道の順に試合が進められ、夕方からサッカー、ソフトボールの順で行われた。ほぼ一日がかりのイベントだ。

応援は野球の試合だけでなく両校応援団が過熱ぶりを競う。吹奏楽の演奏に合わせて全校生徒が一斉に立ち上がる。校歌を高らかに歌い上げる。応援は、ほぼ一日がかりで行われる。

扇港の“早慶戦”

神戸B下で、今年4月に同校へ赴任したばかりの鍋野義人監督（45）は「僕が高校生の時は3連敗したので、今回は勝ちたかった。でも、2000人もの観客の中でプレーすることはなかなかない機会。選手は緊張の中でよくやった」と話した。

「伝統の重みとプレッシャーは、平成生まれの現役球児にも伝わっていたかった」と悔しがった。

（3年・は「日ごろの練習の成果を全校生徒に見てもらう絶好の機会。練習試合ではなかなかできない自身の成長につながる」と神戸二野球部に入った経緯を説明する。「定期戦が移るというのも先輩方から聞いていて、ずっと楽しみだったという。木谷主将も「勉強も野球も両立しようと思って兵庫に進学した。国公立大進学が目標で、大学でも野球を続けたいと語る。この一戦を節目に、夏スタートを切るのだ。

土居光夫さん（79）もその1人だ。「これは両校の選手の青春。夏の大会に次いで、勝たなければならない大きな試合なんです。東京六大学の早慶戦みたいなものです」と力説する。

「私が現役のときは応援団が盛り上げてくれて感極まり、負けると悔し泣きしました」と当時を振り返る。

戦後間もない時期にもあり「野球部所有のボールも数が少なく、部員が自宅で縫って修理。私は捕手だったがミットは皮が薄く、球を受け続けると指先は割れ、マメだらけ。プロテクターやレガースなどはなく、マスクも後ろのゴムが縫んだまま、ひもでくくりつけてはめた」という。

3年ぶりに晴天に恵まれて行われた今年の定期戦。「勝ったことよりも、選手たちが試合できてよかった」と、孫ほども年下の選手たちの姿に目を細めた。（裕）

神戸－兵庫の定期戦は両校生徒たちの大声援の中、熱戦繰り広げられた（撮影・飯室逸平）

伝統の一戦、激しいプレーで試合を進行上げる両校ベイン

◆その昔から伝統の熱戦

複数の伝統校の間で、1年に1回程度、練習試合は一般を通じて行われている。今春のセンバツに出場した高崎（群馬）は前橋（群馬）と毎秋に全校行事として行う。第79会夏の甲子園で延長十八回の熱戦を繰り広げた倉敷（和歌山）と結（石川）も定期戦を行っている。

ウエーブで盛り上がる兵庫の生徒たち

	神戸	兵庫
学校創立	1896年	1908年
部創設	1896年	1908年
学制	神戸県第中学校として創立。文科と語学のスペシャリスト。研究指定校。合唱部も強豪。	兵庫県立第二中学校として創立。95％以上の所属生徒が部活動に所属する文武両道校。吹奏楽部も強豪。
住所	神戸市灘区城の下通1丁目5番1号	神戸市長田区寺池町1丁目4番1号
生徒数	966人（うち女子471人）	829人（うち女子450人）
校友会長	小松左京（作家） 村上春樹（作家） 久万俊二郎（元阪神オーナー） 坂井信也（阪神オーナー）	姫尾河童（舞台芸術家、作家） 東山魁夷（画家） 森滝義巳（元プロ野球・国鉄）
部員数	高鳥忠夫（俳優）	
甲子園出場	夏4回（優勝1回） 春3回	夏1回 春4回

「両校の選手の青春」

OBも観戦心待ち

両校の卒業生もこの日を楽しみに、観戦しにきた。写真。兵庫OBで49年春の甲子園に出場した